

## 奈良田方言アクセントの生成音韻論的考察

奥 田 邦 男

### *Accentuation in the Narada Dialect—A Generative Phonological View*

Kunio OKUDA

#### Abstract

This study is a treatment of the Narada dialect, spoken in a linguistically isolated village in central Japan. The previous treatments of this dialect are critically examined and the popularly accepted notion that ‘every lexical item in Narada has one accent’ is rejected.

It is shown that this dialect has underlying accentual representations and phonological rules which are essentially identical with those of the neighboring dialects (e.g. Koofu) and that the surface difference between these dialects can be attributed to differences in the Pitch Realization Rules. A set of such rules are proposed and illustrated.

Several accentual alternations in Narada are discussed, and it is shown that Narada and Koofu exhibit parallel alternations. The differences between the older generation speakers and the younger speakers are discussed and a possible solution is suggested to account for the differences.

#### §1. は じ め に

南アルプス山系白根山脈の南麓、山梨県南巨摩郡早川町奈良田は、山間僻地であるために古くから他地域との交渉が少なく、長い期間血縁共同社会を構成していた仙境として有名であり、興味あるアクセントを有する地域として早くから注目されてきた。

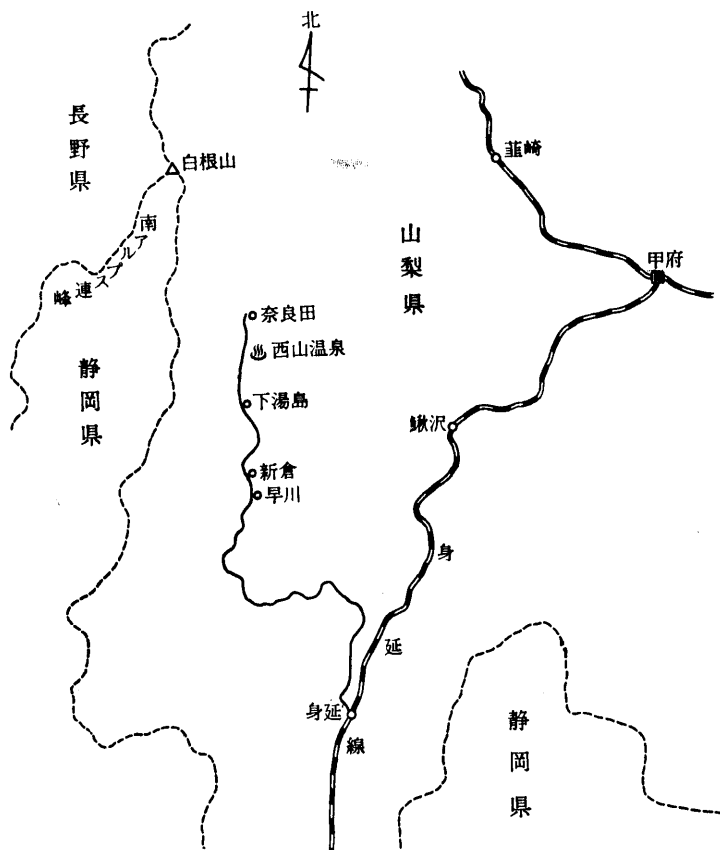
本稿では、生成音韻論の立場から、(1)奈良田アクセントについての従来の解釈の批判を試み、(2)奈良田アクセントの基底表示 (underlying representation) 及びアクセント規則 (accentuation rules) が根本的には近隣の方言 (例えば甲府方言) と同じであることを論じ、(3)奈良田アクセントの高低ピッチを正しく導き出すピッチ顕示規則 (pitch realization rules) を提案し、(4)世代の相違によるアクセントの変化の問題について考察することを、研究の目的とする。

以下の記述に使用する資料は、筆者が臨地調査（1972年8月29日～9月1日）によって得たものに加えて<sup>1)</sup>、次の文献に発表されたものも活用させていただいた。これらの文献から多くの事実を学びえたことを感謝してやまない。

# 文 献

- [1] 望月信彦「山梨県奈良田部落のアクセントの研究」、寺川喜四男・金田一春彦・稲垣正幸共編『国語アクセント論叢』所収、pp. 451～484、法政大学出版局、1951。
- [2] 平山輝男『日本語音調の研究』pp. 264～282、明治書院、1957。
- [3] 稲垣正幸「奈良田方言のアクセント」、稲垣正幸・清水茂夫・深沢正志共編『奈良田の方言』所収、pp. 35～66、山梨民俗の会、1957。
- [4] 渡辺富美雄「共通語と山梨県のアクセントの相違」、日本音声学会編『音声の研究』第8巻所収、pp. 35～66、千代田出版印刷、1957。
- [5] 和田実「アクセント」、国語学会編『方言学概説』所収、pp. 162～208、武蔵野書院、1962。
- [6] 日本放送協会編『全国方言資料』第2巻、関東・甲信越編所収、pp. 415～443、1967。

なお、奈良田部落は、身延線身延駅より45km、早川に沿って北上する奈良田行バスで約2時間40分、甲府市からは約3時間半を要する。戸数約40戸 人口200人余りの小部落で、姓はすべて「深沢」姓一つだけで、従来は主として林業・農業を営んでいたが、奈良田ダムの開発・南アルプス登山ルート of 整備などによって、観光の村として大きく変貌しつつある。



1) 主な調査対象者は次の各位であった。

深沢正志氏(52才)・深沢静子氏(66才)・深沢福義氏(64才)・深沢おこう氏(77才)・深沢とく代氏(76才)・深沢たつこ氏(56才)・小林ぎん氏(47才)・深沢ちえみ氏(13才)。なかでも、深沢正志・深沢静子両氏には長時間にわたってご協力いただいた。深く感謝してやまない。

## §2. 奈良田アクセントについての従来の解釈

奈良田アクセントに関しては、まず、望月氏（文献〔1〕）が「地理的に見て当然東京系統アクセントの分布範囲内にありながら、珍らしくも近畿系統アクセントに属するもの」（p.453）と報告、ついで、平山氏（文献〔2〕）によって、第一種（京阪式）から第二種（東京式）を経て、更に、第三種（京阪式）に変わったものと解釈され、それが定説になっているようである。すなわち、奈良田方言においては、甲府・東京方言などと比較して、起伏型（有核）に属する語はアクセント核（音韻論的に示差的な「さがりめ」）の位置がそれぞれ1モーラずつ後にずれており、平板型（無核）に属する語はアクセント核が語頭にある起伏型（つまり頭高型）に変化していて、「平板型のない起伏型だけの体系を作っている」（文献〔2〕、p.281）と解釈されている。

奈良田アクセントの音声表示及び平山氏による音韻論的記述を、甲府・東京アクセントのそれらと比較して示せば(1)のようになる。奈良田アクセントの音声表示の特徴としては、次の3点を指摘することができる。(a) 1小文節 (minor phrase) 中に高ピッチモーラが一つか二つ現われる。(b) 第2モーラが低ピッチであれば、第1モーラは高ピッチである。(c) 高ピッチモーラが二つ続くことはない。

(1) 奈良田 音声表示 音韻表示	甲府・東京 音声表示 音韻表示
<名詞>	
柄カ° /エ1/	柄カ° /エ/
絵カ° /エ=1/	絵カ° /エ1/
ウシカ° /ウ1シ/	ウシカ° /ウシ/
イヌカ° /イヌ=1/	イヌカ° /イヌ1/
アキカ° /アキ1/	アキカ° /ア1キ/
ウサキ°カ° /ウ1サギ/	ウサキ°カ° /ウサギ/
カカ°ミカ° /カガミ=1/	カカ°ミカ° /カガミ1/
ココロカ° /ココロ1/	ココロカ° /ココロ1/
カブトカ° /カブ1ト/	カブトカ° /カ1ブト/
ニワトリカ° /ニ1ワトリ/	ニワトリカ° /ニワトリ/
カネモチカ° /カネモチ=1/	カネモチカ° /カネモチ1/

アオゾラカ° /アオゾラ <sup>1</sup> /	アオゾラカ° /アオゾ <sup>1</sup> ラ/
ウグ°イスカ° /ウグイ <sup>1</sup> ス/	ウグ°イスカ° /ウグ <sup>1</sup> イス/
コオモリカ° /コオ <sup>1</sup> モリ/	コオモリカ° /コ <sup>1</sup> オモリ/

<動詞・形容詞>

イク /イ <sup>1</sup> ク/	イ <sup>1</sup> ク /イク/
コグ° /コグ <sup>1</sup> /	コグ° /コ <sup>1</sup> グ/
アソブ /ア <sup>1</sup> ソブ/	アソブ /アソ <sup>1</sup> ブ/
アマル /アマル <sup>1</sup> /	アマル /アマ <sup>1</sup> ル/
ナラベル /ナ <sup>1</sup> ラベル/	ナラベル /ナラ <sup>1</sup> ベル/
ナカ°レル /ナガレル <sup>1</sup> /	ナカ°レル /ナガレ <sup>1</sup> ル/
アカイ /ア <sup>1</sup> カイ/	アカイ /アカ <sup>1</sup> イ/
シロイ /シロイ <sup>1</sup> /	シロイ /シロ <sup>1</sup> イ/
カナシイ /カ <sup>1</sup> ナシイ/	カナシイ /カナ <sup>1</sup> シイ/
タダシイ /タダシイ <sup>1</sup> /	タダシイ /タダシ <sup>1</sup> イ/

平山氏の音韻論的分析によれば、句頭の高ピッチは、もし残りのモーラが低ピッチであれば示差的（つまり頭高型アクセント）であるとされる。また、もし句頭以外のモーラが高ピッチであれば、そのモーラにアクセント核があって、句頭の高ピッチは（もしそれがあれば）非示差的であるとされる。さらに、コメラ、カカ°ミカラなどの例において付属語の第1モーラが高く続くことを説明するために、このグループの名詞には末尾モーラの次にアクセント核があると解釈し/コメ=<sup>1</sup>/、/カガミ=<sup>1</sup>/などと記述される。

(1)に基づいて奈良田アクセントと甲府・東京アクセントの対応をまとめれば(表1)のようになる。奈良田においては、nモーラの名詞は甲府・東京と同様、原則としてn+1の型があり、動詞・形容詞は長さに関係なく第1モーラか末尾モーラのどちらかにアクセント核があるということになる。(表1)において、奈良田の場合、(a)は「頭高型」、(b)は後続の付属語の第1モーラが高くなる「尾高上型」、(c)は付属語が低く続く「尾高下型」、(d)および(e)は「中高型」と呼ばれ、従来の解釈によれば、前述のように「無核の型のないアクセント体系」ということになる。

表1 奈良田アクセントおよび甲府・東京アクセントの型の対応

モーラ 型	奈良田				甲府・東京			
	1	2	3	4	1	2	3	4
(a)	○ <sup>1</sup>	○ <sup>1</sup> ○	○ <sup>1</sup> ○○	○ <sup>1</sup> ○○○	○	○○	○○○	○○○○
(b)	○= <sup>1</sup>	○○= <sup>1</sup>	○○○= <sup>1</sup>	○○○○= <sup>1</sup>	○ <sup>1</sup>	○○ <sup>1</sup>	○○○ <sup>1</sup>	○○○○ <sup>1</sup>
(c)		○○ <sup>1</sup>	○○○ <sup>1</sup>	○○○○ <sup>1</sup>		○ <sup>1</sup> ○	○○ <sup>1</sup> ○	○○○ <sup>1</sup> ○
(d)			○○ <sup>1</sup> ○	○○○ <sup>1</sup> ○			○ <sup>1</sup> ○○	○○ <sup>1</sup> ○○
(e)				○○ <sup>1</sup> ○○				○ <sup>1</sup> ○○○

### §3. アクセントの基底表示

上に略述した従来の解釈では、基底アクセント (underlying accent) と表層アクセント (surface accent) の区別がなされていない。生成音韻論の立場からすれば、語彙項目には、それぞれ固有の基底アクセントが表示してあるもの (例えば/コロ<sup>1</sup>ロ/) もあれば、アクセント付加規則 (accent placement rule) によってアクセントを導入すれば済むもの (例えば、/シッカリ/→/シッカ<sup>1</sup>リ/) もあり、さらに、これらの語彙項目が文中で結合した場合、アクセント核の移動・消去が行なわれることもあって、基底アクセント表示と表層アクセント表示 (これによってピッチの高低がきまる) との区別が必要になってくる。以下、従来の奈良田アクセントの解釈を批判し、さらに、奈良田アクセントの基底表示は、少数の非組織的例外を除いて、甲府・東京アクセントの基底表示と同一であることを論ずる。

#### §3.1

平山氏その他 (文献〔2〕〔3〕〔4〕〔5〕) によって、頭高型と解釈されているもの (表1の(a)) は、実は、無核であるということ、すなわち、句頭の高ピッチは、語彙項目に表示されている基底アクセントを反映するものではないことを考えてみたい。以下、三つの論拠を指摘する。

1) まず、(2)にあげた音声表示および平山氏の音韻論的記述を考慮してみる。

(2)

<名詞>

(a) アメカラ /ア<sup>1</sup>メカラ/ (飴から) (a)' ムキ<sup>0</sup>カラ /ムギ<sup>1</sup>カラ/

(b) アメマデ /アメマデ<sup>1</sup>/ (飴まで) (b)' ムキ<sup>0</sup>マデ /ムギ<sup>1</sup>マデ/

<動詞>

- |            |                        |             |                        |
|------------|------------------------|-------------|------------------------|
| (c) アケル    | /ア <sup>1</sup> ケル/    | (c)' タベル    | /タベル <sup>1</sup> /    |
| (d) アケルドオデ | /アケルドオ <sup>1</sup> デ/ | (d)' タベルドオデ | /タベル <sup>1</sup> ドオデ/ |
| (e) アケテクル  | /アケテクル <sup>1</sup> /  | (e)' タベテクル  | /タベ <sup>1</sup> テクル/  |
| (f) アケテイル  | /アケテイル <sup>1</sup> /  | (f)' タベテイル  | /タベ <sup>1</sup> テイル/  |

<形容詞>

- |           |                       |                          |                       |
|-----------|-----------------------|--------------------------|-----------------------|
| (g) クライ   | /ク <sup>1</sup> ライ/   | (g)' ナカ <sup>0</sup> イ   | /ナガイ <sup>1</sup> /   |
| (h) クラクテ  | /クラクテ <sup>1</sup> /  | (h)' ナカ <sup>0</sup> クテ  | /ナガ <sup>1</sup> クテ/  |
| (i) クラケレバ | /クラケレ <sup>1</sup> バ/ | (i)' ナカ <sup>0</sup> ケレバ | /ナガ <sup>1</sup> ケレバ/ |
| (j) クラカッタ | /クラカッタ <sup>1</sup> / | (j)' ナカ <sup>0</sup> カッタ | /ナガ <sup>1</sup> カッタ/ |

名詞「飴」は、(2)の(a)(b)の例から、後続の助詞のアクセントによって、二通りのアクセントの型を有することになる。つまり、無核助詞/カラ/の前では/ア<sup>1</sup>メ/（頭高型）、有核助詞/マデ<sup>1</sup>/の前では/アメ/。一方、名詞「麦」はいずれの場合も/ムギ<sup>1</sup>/という一つの型しかない。もし、この立場を採るとすれば、いわゆる頭高型に属する語彙項目はすべて、音韻論的に二通りのアクセントの型を持つことになり、そのどちらも基底アクセントとして表示する必要があり、望ましいことではない。また、もし/ア<sup>1</sup>メ/（飴）という頭高の形が基本形であると考えれば、(b)の/ア<sup>1</sup>メマデ<sup>1</sup>/という小文節の第二アクセントがなぜ消去されて/ア<sup>1</sup>メマデ/とならないのかということが説明できない<sup>2)</sup>。(b)'の例、/ムギ<sup>1</sup>マデ<sup>1</sup>/→/ムギ<sup>1</sup>マデ/参照)。このことは、名詞+助詞の場合だけにかぎらず、(2)の(c)~(j)に見られるように、動詞・形容詞の単純形、助動詞などとの結合形の場合にも言えることである。このような困難点は、/ア<sup>1</sup>メ/（飴）、/ニ<sup>1</sup>ワトリ/、/ア<sup>1</sup>カイ/、/ク<sup>1</sup>ライ/などを無核の語として扱うことによって解決できる。なぜなら、奈良田の文法規則の中には、「第2モーラが低ピッチであれば、自動的に句頭モーラが高ピッチになる」という音声規則が、いずれにしても必要であり（後述の規則(5 b ii)参照）、この規則によって無核の語句の第1モーラが音声的に高ピッチになることが説明できるからである。

2) 一般に、1小文節中にアクセントが二つ以上ある場合には、最初のアクセント以外はアクセント消去規則 (accent reduction rule) によって消去される。ただし、後続の付属語に [+predominating] という素性指定がある場合には、その付属語のアクセントを残して、先行のアクセントが消去される。（例えば、/タ<sup>1</sup>ベ+マ<sup>1</sup>ス/→/タベマ<sup>1</sup>ス/参照）。

2) 次に、資料(3)に見られるアクセントの移動現象について考察してみよう。甲府・東京方言でもそうであるが、有核の語幹にある特定の付属語が続くと、語幹アクセントが付属語に引き寄せられる (§5.2のアクセント核牽引規則(12)参照)。しかし、無核の語幹にそのような付属語が続いた場合には、引き寄せられるべき語幹アクセントがないので、でき上がる句も無核である。

(3)

- |  |   |
|--|---|
| (a) $\overline{\text{アケタ}}$                  | (a)' $\text{タ}\overline{\text{ベタ}}$           |
| (b) $\overline{\text{アケナカ}}^{\circ}\text{ラ}$ | (b)' $\overline{\text{タベナカ}}^{\circ}\text{ラ}$ |
| (c) $\overline{\text{アケナイ}}$                 | (c)' $\overline{\text{タベナイ}}$                 |
| (d) $\overline{\text{アケソオダ}}$                | (d)' $\overline{\text{タベソオダ}}$                |
| (e) $\overline{\text{アケマイ}}$                 | (e)' $\overline{\text{タベマイ}}$                 |

「開ける」という動詞が無核で「食べる」という動詞が有核であることは、既に(2)で見た。資料(3)の(a)～(e)は無核で、(a)'～(e)'は有核で、しかも(b)'～(e)'においては語幹アクセントが付属語に移っていることは明白である<sup>3)</sup>。従来の解釈に従って(a)～(e)を頭高型だとすれば、語幹アクセントがなぜ(b)'～(e)'の場合のように付属語に牽引されないのかを説明することはできない。

3) 第三に、文献〔2〕(p. 282) および文献〔3〕(p. 61 f.) によれば、奈良田の少年層の話者は、資料(4)に見られるように成年層のアクセントを1 モーラ後退させているという。

- |   |                                   |                                   |
|---|-----------------------------------|-----------------------------------|
| (4)   | (a)                               | (b)                               |
| 成年層   | 少年層                               | 成年・少年層                            |
| $\text{カ}\overline{\text{ラスカ}}^{\circ}\rightarrow$  | $\overline{\text{カラスカ}}^{\circ}$  | $\overline{\text{イカダカ}}^{\circ}$  |
| $\text{コ}\overline{\text{オモリカ}}^{\circ}\rightarrow$ | $\overline{\text{コオモリカ}}^{\circ}$ | $\overline{\text{ニワトリカ}}^{\circ}$ |
| $\overline{\text{ココロカ}}^{\circ}\rightarrow$         | $\overline{\text{ココロカ}}^{\circ}$  |                                   |
| $\text{テ}\overline{\text{ブクロカ}}^{\circ}\rightarrow$ | $\overline{\text{テブクロカ}}^{\circ}$ |                                   |

(4a) に見られるようなアクセントの後退が、(4b) の名詞において起らなかったということは、イカダ、ニワトリなどのいわゆる頭高型の名詞が無核であることを示していると考えられる。第1 モーラの高ピッチは、前述のとおり音声規則の適用によって自動的に現われるのであって、基底アクセントを反映したものではない。この句頭台頭現象は、 $\text{カ}\overline{\text{ラス}}\rightarrow\overline{\text{カ}}$

3)  $\overline{\text{アケタドオデ}}/\overline{\text{アケナイドオデ}}$  に対しては、 $\overline{\text{タベタドオデ}}/\overline{\text{タベナイドオデ}}$  となる。ドオデのアクセントが前者において生き、後者において消去されることに注目せよ。

ラスおよびコオモリ→コオモリなど第2モーラの高ピッチが後退した場合にも見られることから、成人層・少年層ともにこの音声規則を有していると考えられる。

### §3.2

前述(表1)の奈良田の(a)型が、甲府・東京方言などと同様無核であるとすれば、その他の(b)~(c)の型の対応も非常に規則的であることがわかる。すなわち、奈良田方言においては、「アクセント核の次のモーラが音声的に高ピッチとして顕示される」(下記の規則(5b ii)参照)と考えれば、平山氏の提案された /○○○=ʔ/ などという尾高上型(表1の(b))は不要になり、奈良田方言とその近隣の方言はともに、基本的には同じアクセントの基底表示をもっていると考えられる。奈良田方言においてはアクセント核の次のモーラが、甲府・東京方言などにおいてはアクセント核の前のモーラが高ピッチになると解釈することによって、なぜ両方言に著しい鏡像(mirror image)関係が見られるかも説明することができる。更に、§5で見られるように、両方言はともに同じようなアクセント交替規則をもっていることを考え合わせると、両方言の音声上のかなりの相違は、低いレベルの音声規則の違い及び何らかの非組織的な例外に由来すると考えることができる。

## §4. 奈良田方言におけるピッチ顕示規則

上述の論旨に基づき、奈良田アクセントの音声表示を正しく導き出すに必要なピッチ顕示規則<sup>4)</sup>を、次のような形で提案し、検討してみよう。これらの規則は(a)(b)(c)の順序で適用される。

### (5) ピッチ顕示規則

#### a. 低ピッチ付加

% X % → 低<sub>1</sub>

#### b. 高ピッチ付加(rank %)

低 → 高 /  $\left\{ \begin{array}{l} [+acc] \text{ — } \\ \% \text{ — } \text{低 X} \end{array} \right\} \begin{array}{l} (i) \\ (ii) \end{array}$  (Xに高が含まれている場合は随意的)

4) 東京方言におけるピッチ顕示規則に関しては、McCawley (1968, p. 174) を参照。下記の規則(5)その他、本稿で使用する境界要素(junctural element)は、McCawley に従い、次のようなものである。

[@] 大文節境界(最強アクセントが一つだけある領域の境界)

[%] 小文節境界(アクセント核が一つだけある領域の境界)

[#] 単語境界

[#i] 内部単語境界(複合語の内部境界)

[&] 形態素境界

[σ] 音節境界(アクセント核を担う)

これらの境界要素については、McCawley (1968) および Okuda (1970, p. 737) 参照。



## c. ピッチ調整

高 → 低 / 高

ただし、「高」は高ピッチモーラ、「低」は低ピッチモーラ、「低<sub>1</sub>」は低ピッチが1モーラ以上続くことをさす。

基底表示	ピッチ顯示規則	音声表示
例、%ニワトリ%	→ (a, b ii)	→ ニワトリ
%テブ <sup>1</sup> クロ%	→ (a, b i, b ii)	→ テブ <sup>1</sup> クロ
%カゾエ <sup>1</sup> ウタ%	→ (a, b i, b ii)	→ カゾエ <sup>1</sup> ウタ
%イカダ&カラ <sup>1</sup> %	→ (a, b ii)	→ イカダカラ
%イカダ&マ <sup>1</sup> デ%	→ (a, b i, b ii)	→ イカダマ <sup>1</sup> デ
%カ <sup>1</sup> ブト&マ <sup>1</sup> デ%	→ (a, b i)	→ カ <sup>1</sup> ブトマ <sup>1</sup> デ
%ココ <sup>1</sup> ロ&マ <sup>1</sup> デ%	→ (a, b i, b ii)	→ ココ <sup>1</sup> ロマ <sup>1</sup> デ
%カガミ <sup>1</sup> &カラ <sup>1</sup> %	→ (a, b i, b ii)	→ カカ <sup>1</sup> ミカラ
%イヌ <sup>1</sup> &ガ%ナク%	→ (a, b i, b ii, c)	→ イヌ <sup>1</sup> カ <sup>1</sup> ナク
%ウシ&ガ%ナク%	→ (a, b ii)	→ ウシカ <sup>1</sup> ナク

上に掲げたピッチ顯示規則は、文節中の表層アクセント（基底アクセントに種々のアクセント規則が適用されて派生するアクセント）の位置および境界要素に基づいて、ピッチを担う単位（奈良田の場合モーラ）に高低のピッチを付加するものと解釈される。以下、これらの規則がいかに運用されるか、簡単に説明を加える（(5)の諸例参照）。なお、規則(5b i)と規則(5b ii)とは接合的に順序づけられており（conjunctively ordered）、大かっこ{ }によって表記される。したがって、規則(5b i)が適用され、更に条件が満たされれば規則(5b ii)が適用される。

まず、規則(5a)によって、小文節中のモーラがすべて低ピッチになる。次いで規則(5b i)によって、アクセント核の次のモーラが高ピッチになる。次いで、もし小文節の第2モーラが低ピッチであれば、規則(5b ii)によって第1モーラが高ピッチになる。従って、既に§3.1で見てきたように、無核の文節はきまって規則(5b ii)の適用を受け、その結果、自動的に句頭が高くなるのであって、基底アクセントを反映するものではない。なお、第2モーラより後ろに「高」が含まれている場合には、規則(5b ii)の適用は随意的で、(6)に見られるような交替形が可能である。

- (6) アメカラタベル ~ アメカラタベル (飴) (= %アメ&カラ%タベル%)  
 アバラボネカ<sup>1</sup>イタイ ~ アバラボネカ<sup>1</sup>イタイ (= %アバラボネ&ガ%イタイ%)

奈良田方言の音声的特徴として、高ピッチモーラが二つ続くことがないことは既に § 2 で指摘した。しかしながら、一つの発話が二つ以上の小文節から成るとき、規則 (5b i) および (5b ii) の適用によって、小文節境界 (%) の前後に高ピッチモーラが二つ連続して生成される場合がある。ピッチ調整規則 (5c) は、(7) に示すように、高に続く高を低に変えて正しい音声表示を導き出すために必要である。

- (7) %ア<sup>↑</sup>シ<sup>↑</sup>&ガ%イ<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>イ% → \*<sup>↑</sup>ア<sup>↑</sup>シ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup> → ア<sup>↑</sup>シ<sup>↑</sup>ガ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>  
 %イ<sup>↑</sup>ヌ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>&ガ%ナ<sup>↑</sup>ク% → \*<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>ヌ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>ナ<sup>↑</sup>ク<sup>↑</sup> → イ<sup>↑</sup>ヌ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>ナ<sup>↑</sup>ク<sup>↑</sup>

稲垣氏の観察 (文献[3]) によれば、連体詞「この」などの次にくる無核の名詞の第1モーラは(8)の例に見られるように高ピッチであるという。

- (8) コノ<sup>↑</sup>エ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup> (柄)  
 コノ<sup>↑</sup>ウ<sup>↑</sup>シ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup> (牛)  
 コノ<sup>↑</sup>ウ<sup>↑</sup>サ<sup>↑</sup>キ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup> (兎)  
 (コノ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>ミ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup> ~ コノ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>ミ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup> 参照)

連体詞に続く無核の名詞の第1モーラが高ピッチになることを、上に掲げたピッチ顯示規則(6)で説明するにはどうすればよいか。ここでは、「この」などの連体詞の次に小文節境界 [%] があると考え、(8)の音声表示は(9)のような基底表示から導き出されると考えたい。

- (9) %コノ % エ&ガ%  
 %コノ % ウシ&ガ%  
 %コノ % ウサギ&ガ%  
 (%コノ % カガミ<sup>↑</sup>&ガ% 参照)

それぞれの小文節に規則 (5b ii) が適用され、どちらの句頭も高ピッチになると考えられよう。参照例にあげた コノ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>ミ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup> ~ コノ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>ミ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup> という交替形は、/カガミ<sup>↑</sup>/が有核であるため、規則 (5b ii) の適用が随意的であることから、句頭モーラの「カ」が高にも低にもなりうることを示している。

## § 5. 奈良田方言におけるアクセント交替規則

§ 4 において提案したピッチ顯示規則によって、基本的には近隣諸方言と同じ表層アクセント表示から、奈良田アクセントのユニークな音声表示が導き出されることがわかった。次に、アクセントの基底表示からそのような表層アクセント表示を導き出す、種々のアクセント交替規則を検討してみよう。既に触れたように、奈良田におけるさまざまなアクセント交

替現象と同様の現象が、甲府・東京方言などにも見られることから、奈良田方言のアクセント交替規則も、基本的には近隣方言と同様の形式をもっていると考えられる。以下述べる種々の規則については、東京方言の場合 McCawley (1968) に詳述されており、ここでは必要以上に詳しく言及しない。

### §5.1 複合名詞アクセント規則

奈良田方言における複合名詞アクセントの派生を検討してみよう。複合名詞の表層アクセントは、形態素中に含まれるアクセント情報と、(最)後部要素のモーラ数によって規則的に導き出すことができると考えられる。奈良田方言の複合名詞は、概略、甲府・東京方言と同じ表層アクセント表示を有すると考えられる。例えば、「あばら骨」は両者とも無核 (#アバラ<sub>i</sub>ボネ#)で、音声的には奈良田でアバラボネとなり、甲府・東京ではアバラボネとなる。また、「田舎娘」は両者とも後部要素の第1モーラにアクセント核があり (#イナカ<sub>i</sub>ム<sup>↑</sup>スメ#)、それぞれ、イナカムスメ、イナカムスメとなる。McCawley の複合規則<sup>5)</sup> (p. 180) の要旨をインフォーマルに述べれば、(10)のようになる。これらの規則は(a)(b)(c)の順序で適用される。

(10) a. 複合名詞の後部要素の最初のアクセント核<sup>6)</sup>を生かし他を消去する。

b. 後部要素が3モーラ以上で、平板型か尾高型ならば、後部要素の第1モーラにアクセント核を挿入し他を消去する。

c. 尾高型複合名詞を平板化する。

複合規則(10)の適用例をいくつか示せば(11)のようになる。

(11) 基底表示	規則(a)	規則(b)	規則(c)	音声表示
イナカ <sub>i</sub> ムスメ <sup>↑</sup>	→イナカ <sub>i</sub> ムスメ <sup>↑</sup>	→イナカ <sub>i</sub> ム <sup>↑</sup> スメ	—	イナカムスメ
オヤ <sup>↑</sup> <sub>i</sub> ココ <sup>↑</sup> ロ	→オヤ <sub>i</sub> ゴコ <sup>↑</sup> ロ	—	—	オヤココロ (カ°)
キ <sub>i</sub> キ <sup>↑</sup> ンゾク	→キ <sub>i</sub> キ <sup>↑</sup> ンゾク	—	—	キキンゾク
イサカイ <sub>i</sub> ハタケ	→	イサカイ <sub>i</sub> バ <sup>↑</sup> タケ	—	イサカイバタケ
イナカ <sub>i</sub> モノ <sup>↑</sup>	→イナカ <sub>i</sub> モノ <sup>↑</sup>	→	イナカ <sub>i</sub> モノ	イナカモノ (カ°)
アサメシ <sub>i</sub> マ <sup>↑</sup> エ	→アサメシ <sub>i</sub> マ <sup>↑</sup> エ	—	—	アサメシマエ (カ°)
カ <sup>↑</sup> プト <sub>i</sub> ムシ	→カプト <sub>i</sub> ムシ	—	—	カプトムシ
アブ <sup>↑</sup> ラ <sub>i</sub> セミ <sup>↑</sup>	→アブラ <sub>i</sub> セミ	—	—	アブラセミ
カザリ <sub>i</sub> マ <sup>↑</sup> ド	→カザリ <sub>i</sub> マ <sup>↑</sup> ド	—	—	カザリマド

5) McCawley の複合規則に修正の必要があることは、Okuda (1970, p. 750) および Okuda (1971, pp. 183~277) で論じたが、ここでは割愛する。

6) McCawley は、単独の時に平板でない名詞で複合した時に構成要素間にアクセント核のくる、1形態素2モーラ以下の名詞には、二つアクセント核を認めている(例、「ウタ<sup>↑</sup>(歌)」、「ヌ<sup>↑</sup>シ(主)」)。

奈良田方言の複合名詞アクセントが、規則(10)ですべて説明できるわけでないことは既に述べた。例えば、 $\overline{\text{アリカ}}^\circ \text{タミカ}^\circ$  (有難味)・ $\overline{\text{アキメクラカ}}^\circ$  (明盲)などの派生アクセント核(/アリガタ $\#_1$ ミ $\uparrow$ /・/アキ $\#_1$ メクラ $\uparrow$ /)は明らかに語尾にあり、ある限られた尾高型複合名詞には規則(10c)の平板化が適用されないことがわかる。また、 $\overline{\text{ミズタマリカ}}^\circ$  (水溜り)・ $\overline{\text{ミズクスリカ}}^\circ$  (水薬)などは、後部要素が3モーラ平板型名詞であるにもかかわらず、規則(10b)によって後部要素第1モーラにアクセント核が挿入されないで、それぞれ/ミズ $\#_1$ タマリ/→/ミズ $\#_1$ タマリ/ および /ミズ $\#_1$ クスリ/→/ミズ $\#_1$ グスリ $\uparrow$ /となっていることがわかる。ここで注目すべきは、このような例外的な複合名詞においても、奈良田方言と甲府・東京方言は概して同じ表層アクセント表示を有しており、いずれにしても規則(10)のほかに、同様のアクセント交替規則が存在すると考えられることである。

## §5.2 アクセント核牽引規則

次に、奈良田方言におけるアクセント核牽引規則 (accent attraction rule) について検討しよう。既に §3.1 で見たように、有核の動詞・形容詞語幹<sup>7)</sup>にアクセント牽引語尾が接続されると、語幹アクセントが語尾方向へ引き寄せられる。アクセント核牽引規則およびその適用例を示せば、それぞれ(12)および(13)ようになる。

### (12) アクセント核牽引規則 (rank #)

$$\sigma \rightarrow [+acc] / \left\{ \begin{array}{l} [+acc] \dots \& \left\{ \begin{array}{l} na<\_\>gara \\ na<\_\>i \\ ta<\_\>i \\ ma<\_\>i \\ soo<\_\>da \end{array} \right\} \\ [+acc] M<\_\> \& \left\{ \begin{array}{l} -ru/-i \\ -re\uparrow ba \\ -ne\uparrow ba \\ -ro \end{array} \right\} \end{array} \right\}$$

7) 語彙目録において、動詞・形容詞の語幹アクセント情報は、有核 ([+accented]) か無核 ([−accented]) かだけ記しておけば十分である。有核語幹には、下記のアクセント付加規則(i)によって、アクセント核が自動的に導入される。詳しくは McCawley (1968, p. 145) 参照。

(i) アクセント付加規則:

$$\begin{array}{c} S \\ \{Verb\} \\ \{Adj\} \end{array} \rightarrow [+acc] / \_\ (C)(V) \& \\ [+accented]$$

例: ta $\uparrow$ be-(食べ)、kota $\uparrow$ e-(答え)、mi $\uparrow$ -(見)、de $\uparrow$ -(出); ka $\uparrow$ k-(書)、na'o $\uparrow$ s-(直); ta $\uparrow$ ka-(高)、mizi $\uparrow$ ka-(短)、yo $\uparrow$ -(良)、ko $\uparrow$ -(濃)。

(13) (a)有核語幹

タ<sup>1</sup>ベ&ナガラ → タベ&ナ<sup>1</sup>ガラ (=タ<sup>1</sup>ベナカ<sup>0</sup>ラ)  
 タ<sup>1</sup>ベ&ナイ → タベ&ナ<sup>1</sup>イ (=タ<sup>1</sup>ベナイ)  
 タ<sup>1</sup>ベ&タイ → タベ&タ<sup>1</sup>イ (=タ<sup>1</sup>ベタイ)  
 タ<sup>1</sup>ベ&マイ → タベ&マ<sup>1</sup>イ (=タ<sup>1</sup>ベマイ)  
 タ<sup>1</sup>ベ&ソオダ → タベ&ソオ<sup>1</sup>ダ (=タ<sup>1</sup>ベソオ<sup>0</sup>ダ)  
 タ<sup>1</sup>ベ&ル → タベ<sup>1</sup>&ル (=タ<sup>1</sup>ベ<sup>1</sup>ル)  
 タ<sup>1</sup>ベ&レ<sup>1</sup>バ → タベ<sup>1</sup>&レ<sup>1</sup>バ (=タ<sup>1</sup>ベ<sup>1</sup>レ<sup>1</sup>バ)  
 タ<sup>1</sup>ベ&ネ<sup>1</sup>バ → タベ<sup>1</sup>&ネ<sup>1</sup>バ (=タ<sup>1</sup>ベ<sup>1</sup>ネ<sup>1</sup>バ)  
 タ<sup>1</sup>ベ&ロ → タベ<sup>1</sup>&ロ (=タ<sup>1</sup>ベ<sup>1</sup>ロ)

(b)無核語幹

アケ&ナガラ (=ア<sup>0</sup>ケナカ<sup>0</sup>ラ)  
 アケ&ナイ (=ア<sup>0</sup>ケナイ)  
 アケ&タイ (=ア<sup>0</sup>ケタイ)  
 アケ&マイ (=ア<sup>0</sup>ケマイ)  
 アケ&ソオダ (=ア<sup>0</sup>ケソオ<sup>0</sup>ダ)  
 アケ&ル (=ア<sup>0</sup>ケ<sup>0</sup>ル)  
 アケ&レ<sup>1</sup>バ (=ア<sup>0</sup>ケ<sup>0</sup>レ<sup>1</sup>バ)  
 アケ&ネ<sup>1</sup>バ (=ア<sup>0</sup>ケ<sup>0</sup>ネ<sup>1</sup>バ)  
 アケ&ロ (=ア<sup>0</sup>ケ<sup>0</sup>ロ)

(13 a)においては、アクセント付加規則(i) (注7参照)によって導入された語幹/タ<sup>1</sup>ベー/のアクセント核が規則(12)によって語尾の方向へ牽引されるが、(13 b)においては、語幹/アケー/が無核であるため規則(12)は適用されず、小文節全体が無核になるかあるいは語尾のアクセントが生かされる。(13)の例に見られる基底アクセント表示および表層アクセント表示は奈良田方言も甲府・東京方言も同じであり、アクセント核牽引規則(12)がこれらの方言の共通した規則であることがわかる。

§5.3 助詞「の」による尾高型アクセントの無核化

名詞に助詞が付いた場合、名詞のアクセントは変化しないのが原則であるが、「の」は例外的で(14 b)に見られるように尾高アクセントを無核に交替させる。(この現象は、東京方言などにおいても見られることは周知のとおりである。)

(14) 語彙項目

(a)尾高型

(b)無核型

/ウマ <sup>1</sup> /	ウマカ <sup>0</sup> ススム	ウマノアシカ <sup>0</sup>
/アシ <sup>1</sup> /	アシカ <sup>0</sup> イタイ	アシノイタミカ <sup>0</sup>
/ユキ <sup>1</sup> /	ユキカ <sup>0</sup> フル	ユキノアキマカ <sup>0</sup> アル
/ノミ <sup>1</sup> /	ノミカ <sup>0</sup> サス	ノミノフウフ
/ヒカリ <sup>1</sup> /	ヒカリカ <sup>0</sup> ハヤイ	ヒカリノハヤサ
/アツキ <sup>1</sup> /	アツキヲニル	アツキノコナラ
/タカラ <sup>1</sup> /	タカラヲサカ <sup>0</sup> ス	タカラノモチク <sup>0</sup> サレ

資料(14)のアクセント交替を可能にする規則として、(15)のようなアクセント核牽引規則が考えられる。

(15) 助詞「の」によるアクセント核牽引規則 (rank %)

$\sigma \rightarrow [+acc]in\ env. (...SS<+acc>\&\ no<—>) \text{Nominal}$

この規則によって、二音節(モーラではない) 以上の名詞の語末アクセントが、助詞「の」の後ろの音節境界に引き寄せられるが、助詞「の」は常に小文節の終わりに位置するので、引き寄せられたアクセント核は音声的には顯示されず、平板型と同じ音声表示になると考えられる。資料(14b)の音声表示を反映する表層アクセント表示が、基底アクセント表示から生成される過程を示せば、(16)のようになる。

(16) 基底アクセント表示	表層アクセント表示	音声表示
%ウマ <sup>1</sup> &ノ%アシ <sup>1</sup> &ガ%	→%ウマ&ノ <sup>1</sup> %アシ <sup>1</sup> &ガ%	ウマノ <sup>1</sup> アシガ <sup>0</sup>
%アシ <sup>1</sup> &ノ%イタミ <sup>1</sup> &ガ%	→%アシ&ノ <sup>1</sup> %イタミ <sup>1</sup> &ガ%	アシノ <sup>1</sup> イタミガ <sup>0</sup>
%ユキ <sup>1</sup> &ノ%アキマ&ガ%アル%	→%ユキ&ノ <sup>1</sup> %アキマ&ガ%アル%	ユキノ <sup>1</sup> アキマカ <sup>0</sup> アル
%ノミ <sup>1</sup> &ノ%フウフ%	→%ノミ&ノ <sup>1</sup> %フウフ%	ノミノ <sup>1</sup> フウフ
%ヒカリ <sup>1</sup> &ノ%ハヤサ%	→%ヒカリ&ノ <sup>1</sup> %ハヤサ%	ヒカリノ <sup>1</sup> ハヤサ
%アヅキ <sup>1</sup> &ノ%コナ <sup>1</sup> ヲ%	→%アヅキ&ノ <sup>1</sup> %コナ <sup>1</sup> ヲ%	アヅキノ <sup>1</sup> コナヲ
%タカラ <sup>1</sup> &ノ%モチグサレ%	→%タカラ&ノ <sup>1</sup> %モチグサレ%	タカラノ <sup>1</sup> モチク <sup>0</sup> サレ

(16)に掲げた基底アクセント表示および表層アクセント表示は、東京方言の場合も同一であり、両方において、規則(15)によるアクセント交替現象が見られることがわかる。奈良田方言の音声表示と東京方言のそれとが、著しく相違するのは、既に § 4 で述べたように、主としてピッチ顯示規則の違いによるものである。

## § 6. 少年層におけるアクセントの移行について

文献〔2〕(p. 282) および文献〔3〕(p. 61 f.) によれば、奈良田方言では、少年層のアクセントは成人層のそれより右へ1モーラ移行しているといわれる。生成音韻論では、そのような世代の相違にみられるアクセントの変化は、文法規則の変化としてとらえられるが、ここでは、文法規則がどのように変わったと考えるべきかを検討してみる。まず与えられた資料に基づいて考察してみよう。

このような世代の相違からくる音声表示の部分的な異同を説明するには、それぞれの文法体系のどのレベルにどのような違いがあると考えられるべきであろうか。まず、成年層と少年層

の語彙目録中のそれぞれの語彙項目の基底アクセント表示に変化があったと考えると、なぜ(17)の例に変化が見られないのか、また、なぜ(18a)の少年層の例にピッチの交替が見られるのかを説明することができない。また、同一方言内において、かなりの語彙項目の基底アクセントが異なるとは考えがたいことであろう。一方、両世代の基底アクセント表示は同じであるが、少年層の音韻規則の終わりに、(19)のようなアクセント核移動規則が加わったということも考えられないことではない。

まず注目すべきは、以下に見るごとく、このアクセント移行といわれるものが全面的に行なわれるのではなく、小文節中のアクセント核の位置及び小文節の長さによることである。資料(17)から、平板型の名詞および尾高型の名詞は(助詞「が」が付いた場合も)、音声的には両世代に相違は見られないことがわかる。

(17) 成人層・少年層に音声表示の相違が見られない場合

(a)無核型

/○/      エ (カ°) (柄)  
/○○/    ハナ (カ°) (鼻)  
/○○○/   ウサキ° (カ°)  
/○○○○/   ニワトリ (カ°)  
.....

(b)尾高型

/○<sup>1</sup>/      エ ~ エカ° (絵)  
/○○<sup>1</sup>/    ハナ (カ°) (花)  
/○○○<sup>1</sup>/   カカ°ミ (カ°)  
/○○○○<sup>1</sup>/   アシオト (カ°)  
.....

(17a)の名詞は、従来頭高型と解釈されてきたが、無核と解釈すべきことは既に述べたとおりである。

次に、資料(18)のいわゆる「中高型」名詞に見られる成人層と少年層との音声表示の違いを検討してみよう。成人層の場合には、助詞「が」が付いても音声表示に変化は見られない。しかし、少年層の場合には、(18a)において「が」が付くと高ピッチが1モーラ右に移行し、(18b)および(18c)においては「が」に関係なく高ピッチが1モーラ右に移行している。

(18) 成人層・少年層に音声表示の相違がある場合

成人層

少年層

(a)/(...)○<sup>1</sup>○/

ハ<sup>1</sup>ル (カ°)  
コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ロ (カ°)  
ア<sup>1</sup>シア<sup>1</sup>ト (カ°)

ハ<sup>1</sup>ル ~ ハ<sup>1</sup>ルカ°  
コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ロ ~ コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ロカ°  
ア<sup>1</sup>シア<sup>1</sup>ト ~ ア<sup>1</sup>シア<sup>1</sup>トカ°

(b)/(...)○<sup>1</sup>○○○/

カ<sup>1</sup>ラス (カ°)

カ<sup>1</sup>ラス (カ°)

ア<sup>1</sup>サ<sup>1</sup>カ<sup>1</sup>オ (カ°)

ア<sup>1</sup>サ<sup>1</sup>カ<sup>1</sup>オ (カ°)

ア<sup>1</sup>ブラゼミ (カ°)

ア<sup>1</sup>ブラゼミ (カ°)

(c)/(...)○<sup>1</sup>○○○○/

コ<sup>1</sup>オ<sup>1</sup>モリ (カ°)

コ<sup>1</sup>オ<sup>1</sup>モリ (カ°)

オ<sup>1</sup>バ<sup>1</sup>ア<sup>1</sup>サン (カ°)

オ<sup>1</sup>バ<sup>1</sup>ア<sup>1</sup>サン (カ°)

イ<sup>1</sup>シ<sup>1</sup>ド<sup>1</sup>オ<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>オ (カ°)

イ<sup>1</sup>シ<sup>1</sup>ド<sup>1</sup>オ<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>オ (カ°)

(19) 少年層におけるアクセント核移動規則

M<sup>1</sup>MM → MM<sup>1</sup>M / %X—Y%

例%ハナ<sup>1</sup> (&ガ)% (適用されない)

= ハ<sup>1</sup>ナ (カ°)

%カガミ<sup>1</sup> (&ガ)% (適用されない)

= カ<sup>1</sup>カ°ミ (カ°)

%ハ<sup>1</sup>ル% (適用されない)

= ハ<sup>1</sup>ル

%ハ<sup>1</sup>ル&ガ% → %ハ<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>&ガ%

= ハ<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>カ°

%コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ロ% (適用されない)

= コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ロ

%コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ロ&ガ% → %コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>&ガ%

= コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>カ°

%カ<sup>1</sup>ラス (&ガ)% → %カ<sup>1</sup>ラ<sup>1</sup>ス&ガ%

= カ<sup>1</sup>ラ<sup>1</sup>ス (カ°)

%アサ<sup>1</sup>ガオ (&ガ)% → %アサ<sup>1</sup>ガ<sup>1</sup>オ (&ガ)%

= ア<sup>1</sup>サ<sup>1</sup>カ°オ (カ°)

%オバ<sup>1</sup>アサン (&ガ)% → %オバ<sup>1</sup>ア<sup>1</sup>サン (&ガ)%

= オ<sup>1</sup>バ<sup>1</sup>ア<sup>1</sup>サン (カ°)

規則(19)が、少年層の文法に新しく加わったということは、音韻規則に相違があって、音声規則であるピッチ顯示規則には変化が起こらなかったということになる。しかしながら、上で見てきたように、種々の音韻規則（アクセント交替規則）は音声規則に比べて方言間においても変化に対する安定度がかなり高いと考えられる。

従って、資料(17)および(18)に見られる世代の相違による音声表示の対応は、むしろ、ピッチ顯示規則の相違に由来すると考えられるべきではあるまいか。資料(17)および(18)の少年層の音声表示を導き出すに必要なピッチ顯示規則を示せば(20)のようになる。

(20) 少年層におけるピッチ顯示規則

a. 低ピッチ付加

% X % → 低<sub>1</sub>



## b. 高ピッチ付加 (rank %)

$$\text{低} \rightarrow \text{高} / \left\{ \begin{array}{l} [+acc](\text{低})\text{——} \\ \% \text{——} \text{低 } X \end{array} \right\} \begin{array}{l} (i) \\ (ii) \end{array} \quad (X \text{に高が含まれている場合は随意的})$$

既に § 4 でも見たように、まず規則(20 a)によって小文節中のモーラがすべて低ピッチになる。次いで規則(20 b i)によって、アクセント核に後続する低が高に変わるわけであるが、この規則(20 b i)は生成音韻論の表記上の規約 (notational convention) に従い、( ) を用いて二つの規則 ((A)低→高/[+acc]低—および (B)低→高/[+acc]—) が一つの規則にまとめられている。すなわち、アクセント核の次に低低という連続があれば低高が生成されるが、アクセント核に続く低低という連続がなくて低だけがある場合には、その低が高に変わるのである。このように ( ) によって 単純化された 二つの 規則は 離接的順序 (disjunctive ordering) をもっており、(A)が適用できない場合にのみ(B)が適用でき、両方の規則を適用することはできない。(上述のように接合的順序をもっている規則の場合 ( { } を用いて表記される ) には両方の 規則を適用することができる。) 次いで、小文節の第2モーラが低であれば、規則(20 b ii) (= (5 b ii))によって句頭モーラが高になる。これらの規則によって、少年層の基底アクセント表示 (成人層と同じ) から音声表示が生成される過程を示すと(24)のようになる。

(24) 基底表示	ピッチ顕示規則	音声表示
%ウサギ&ガ%	→ (20 a, 20 b ii)	→ $\overline{\text{ウ}}\text{サキ}^{\circ}\text{カ}^{\circ}$
%ニワトリ&ガ%	→ (20 a, 20 b ii)	→ $\overline{\text{ニ}}\text{ワトリカ}^{\circ}$
%カガミ%	→ (20 a, 20 b ii)	→ $\overline{\text{カ}}\text{カ}^{\circ}\text{ミ}$
%カガミ%&ガ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{カ}}\text{カ}^{\circ}\text{ミカ}^{\circ}$
%アシオト%	→ (20 a, 20 b ii)	→ $\overline{\text{ア}}\text{シオト}$
%アシオト%&ガ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{ア}}\text{シオトカ}^{\circ}$
%ココロ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{コ}}\text{コロ}$
%ココロ%&ガ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{コ}}\text{コロカ}^{\circ}$
%アシアト%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{ア}}\text{シアト}$
%アシアト%&ガ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{ア}}\text{シアトカ}^{\circ}$
%カラス&ガ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{カ}}\text{ラスカ}^{\circ}$
%アサカオ&ガ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{ア}}\text{サカ}^{\circ}\text{オカ}^{\circ}$
%コオモリ&ガ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{コ}}\text{オモリカ}^{\circ}$
%オバアサン&ガ%	→ (20 a, 20 b i, 20 b ii)	→ $\overline{\text{オ}}\text{バアサンカ}^{\circ}$

ここで注目すべきことは、§ 4 で提案された成人層のピッチ顕示規則(5)と、ここに提案された少年層のピッチ顕示規則(20)との違いは、高ピッチ付加規則(b i)に見られることである。両世代の規則を比較すれば、成人層の場合には(5 b i)が低→高/[+acc]—であるのに対して、少年層の場合には(20 b i)が低→高/[+acc] (低)—である。後者の規則において(低)が加わり、規則としては複雑化したと考えられる。

上に提案された規則(5)および規則(20)の相違によって、文献〔2〕および〔3〕に報告された世代の相違によるアクセントの違いが説明できるとすれば、それはどういうことを意味しているのであろうか。それは、奈良田方言においては、成人層も少年層も基本的には同じ基底アクセント表示をもち、同じ音韻規則をもちながら、低いレベルのピッチ顕示規則の僅かな相違によって、かなり顕著な音声表示の違いが生じたということである。ところで、世代の相違による言語の変化は、生成音韻論においては、一般に文法規則の簡単化 (simplification) に由来すると考えられている。しかしながら、ここで考察した変化は、僅かながら少年層世代の規則が複雑化したことを示している。このような規則の変化が、言語習得の上で一時的、過渡的なものかあるいはかなり安定したものかという問題は今後の課題として残さざるをえない。この点に関しては、文献〔2〕〔3〕において少年層(当時15才前後)として扱われた人々が、現在どのような音声表示を有しているかを追跡調査する必要がある。1972年8月、筆者が臨地調査を行なった折には、残念ながら30才前後の人々のアクセントを調査することができなかった。なお、筆者が行なった少女のアクセント調査(13才、西山中学1年)では、上に見てきたような奈良田方言のユニークな音声表示は既に見られず、東京方言とほとんど同じ音声表示を示している。一例を(22)にあげよう。

(22) <名 詞>

ハナ ～ ハナカ° (鼻)  
 ウサキ° ～ ウサキ°カ°  
 ハナ ～ ハナカ° (花)  
 カカ°ミ ～ カカ°ミカ°  
 アシアト ～ アシアトカ°  
 アサカ°オ ～ アサカ°オカ°  
 カラス ～ カラスカ°  
 コオモリ ～ コオモリカ°

<動詞・形容詞>

トメル ～ トメタ  
 ハタラク ～ ハタライタ  
 ウコ°ク ～ ウコ°イタ  
 タテル ～ タテタ  
 アカイ ～ アカカッタ  
 ハヤイ ～ ハヤカッタ

現在の奈良田の少年層の音声表示が、成人層・老人層と異り、急速に共通語化している理由は、種々考えられるが、なかでも10年ばかり前に西山小・中学校奈良田分校が閉鎖され、

就学児童が全員隣接部落の西山小・中学校へバス通学するようになったことが大きな要因であろうと思われる。文献〔2〕によると、近接部落の湯島・新倉方言は東京式音声表示をっており、奈良田の少年層が学校教育を通じて東京式のピッチ顯示規則を習得したと考えられよう。いずれにしても、上に考察してきたようにアクセントの基底表示・表層表示には、各世代を通じて何ら違いは見られず、それぞれの世代の音声表示の違いは、ピッチ顯示規則の変化に由来すると考えられる。

### 参 考 文 献

- Chomsky, Noam, and Morris Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.
- McCawley, James D. 1968. *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- Okuda, Kunio. 1970. Review of *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, by J. D. McCawley. *Language* 46. 736-53.
- . 1971. *Accentual Systems in the Japanese Dialects*. Doctoral Dissertation, UCLA. Ann Arbor, Mich.: University Microfilms.

### (付記)

Okuda (1971, 英文) の第1章の一部と論旨が重複するところがある。あわせて参照されたい。

1972. 9.17 西日本言語研究会第2回大会(島根大学)にて口頭発表。

1972.11.25 再稿。